

845

繪師長尾吉助

西南河曾江白渡

白渡





京地祇園町
とりのゆきふんと雲
遠み藤子松江と見
そのとりの訓添
の約足とめり

中谷半七

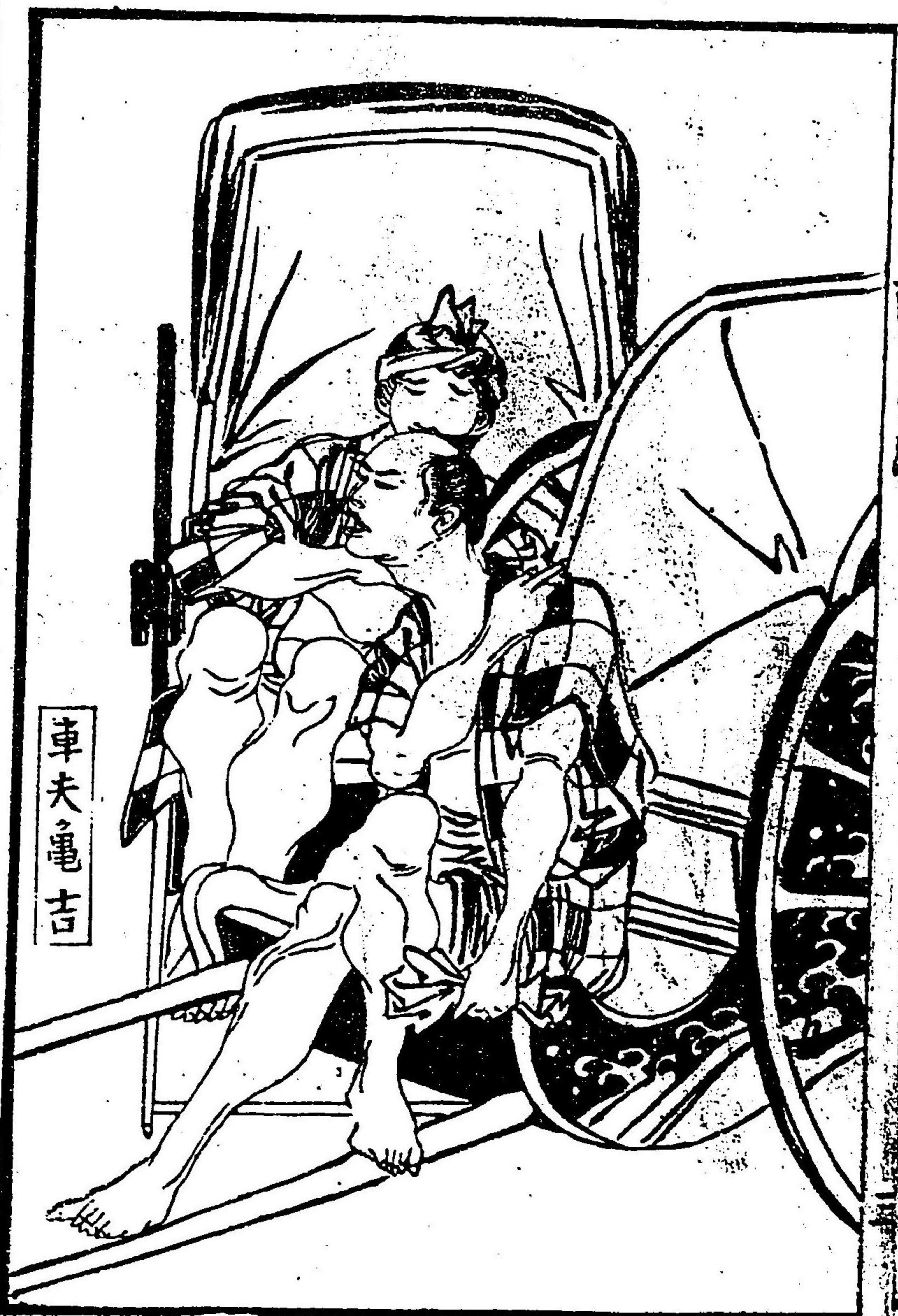
阿曾沼秀男

松栄



（五島原）

（五島原）



車夫亀吉



巡查両
名車夫
七松
島方少堅方
不賊
縛不向方

長瀬吉君

長瀬吉君

阿曾沼秀男

偽名と言
てのまゝと
せん本姓
現るるまで
くみはく
ところ



多和田久吉君

西南阿曾の白浪

中庸に言ふや。莫見乎隱と。善惡俱以之と。顯を争ひ赫々
然たる天鏡の面ふ輝らす。曉朝に開く蓮花の泥より
出て泥に染ゆを其名と。世に薫まらに引りて。清白貴
重の人。跡を生と得たり。泥坊と。汚名と流す。竹木
ふも。かり。譚の一條の泥に縁わら。名詮自性。其名も
阿曾沼秀男とて。白浪立る。周内の海縁の林り山口縣
舊の士族の家に産で。と。怨と。思事の本。指父兄の教
諭の薄き。あや。厚き。朝恩も。不顧。河藩中村備三か
る者。と。心と。合せて。明治七年。五月の頃。小肥前なる。佐賀
の暴徒江藤新平の。逆意に組り。心まぐる。官なる。文

偽名と言

このまゝと

きん本性

現るこそぞ

くみはくの

ところ

長瀬吉君



多和田久吉君

阿曾沼秀男

西南阿曾の白浪

中庸に言ふや。莫見乎隱と善惡俱に之と顯を争ふ。赫々
 然たる天鏡の面小輝らす。曉朝に開く蓮花の泥より
 出て泥に添ひを其名とせに。薰るに引きて。清白貴
 重の人。歎に生を得ふ。り泥坊と。汚名と流す。の柳木
 ふも。かり。譚の。條の。泥の。縁を。名詮。自性。其名も
 阿曾沼秀男とて。白浪立る。周防の。海鏡の。林の。山口。縣
 舊の。士族の。家に。産て。と。怨を。悪事。の。二本。指父。兄の。教
 諭の。薄さ。と。あや。辱す。朝。恩も。不顧。同藩。中村。備三。な
 る。者。と。心を。合せて。明。七。年。の。頃。小。肥。前。なる。佐。賀
 の。暴徒。江藤。新平。の。逆。意。に。組。ひ。忍。多。る。官。なる。文。

の國鹿兒島の城主ふして。当今の華族島津忠義君少てを在
しける。以時秀男思ふより彼の名たる金満大彦定て旅
金も充満ありん是とてふと工夫して我物ふこそするなりは
兼ての念願成就せんと。又りや在る意の駒心の猿り手長猿
あしき思業の猿智恵も。未の木りも落ると知るは。二風
と幾らも胸の火の煙りに運ぶ車より心の急に石炭の匂い
ふあいで名に負うる浪花の里の梅田ちるる駐車場にあと
著にりり。斯る阿曾沼秀男の島津君の後方より。止宿
の何所と窺いに。其夜の大阪北堀江三番丁林常吉方少て有
りまをも秀男のそしらぬ顔ふて其家に一泊頼こらんど再

三辞退まれ詮方なく。其夜ハ松島花街なる。帝賃業の
清水ふ祿方にて。一時の愉快時とらうし。午前の四時ごろ
其家と立出。兼て見認りの三番丁。自己が心の縁りな
る。林と記す標札に。爰なんめりて心でうたぐと。何処でり
手廻す階子と以て。二階とじて忍び入る。往昔の逆茂
木鉄の城門外丸本丸八門各甲。楯直の護衛や不寐の
番。十重に二十重に囲繞まされて。嚴重なりし城主も。
今ハ薄戸の旅泊の森殿時と笑顔の秀男ハおめりが
俣に忍び入とぞ。主従俱の森入り鼻。何白川の夜と
あく。とらるとあくに搔い集め。其中にある朋乱二個

に従者の追水伊之丞と。瀧間藤右門兩人が。忠吉君
より預りたる。大切の品物。中には。五円十円取交措
幣。合せて其數五千円。まゝ二個に。八百余円。其はう
腰提げ手扱。糸帛入。心の依に奪ひ取り仕合せ。し
野の花さぐり。頭て散める命と。あまぬ白波尻に枕
どうけて。何処へう逃げ去りたり。
百敷や。大官人の日間毎に。くさす櫻の七重八重。げん
九重の都府まで。四條五條の橋の上。老若男女貴賤
都鄙。色めさるる。形勢へ。東方西方南方北方。むじもいま
も河原より。東に当る祇園町。花のさやうを。わかじ。

並べし軒の其中に。下京十五區祇園町。南側みて。席賃業
中谷羊七。その旅宿屋あり。本年五月九日の事。たつら。
主齡ハ廿五六。相應る衣服に。人品も。賤しく。出立に。
誰が眼に見ても。官員。武家の古手と思し。が。飄々
然と入り来り。一泊の程。依頼入ると。言葉。あまの言ひ入る。
ハ是あん。大坂北堀江三番丁。林常吉方。い。あ。て。島津君
の大金と。奪ひ取りし。兇賊。あ。て。向曾。沼。秀。男。た。り。ぞ。と。
神々しく。ぬ身の中谷羊七。怪敷姿。も。さ。れ。ば。兼。て。の。業。体
否。應。ず。し。何。処。く。来。さ。う。知。ら。ね。と。も。あ。早。あ。ま。の。族。扱
に。お。茶。よ。煙。艸。よ。ま。づ。坐。敷。へ。と。一。人。の。客。も。業。体。に。と。れ。ば

河津の始末

ハ從者の迫水伊之丞と。瀧聞藤右門兩人が。忠吉君
より預りたる。大切の品物。中には。五円十円取交措
幣。合せて其數五千円。まゝ二個の。八百余円。其はう
腰提げ手扱。入る。心の終に奪ひ取り仕合せし
野の花さうり。頭て散ぬる命と。いふ。ぬ白波尻に枕
とうけて。何処へう逃げ去りたり。
百敷や。大官人の日間毎に。うさす。櫻の七重八重。げん
九重の都府まで。四條五條の橋の上。老若男女貴賤
都鄙。色めさる。形勢ハ。東方西方南方北方。むしりもい
ち河原さう。東に当る。祇園町ハ。花のさゆしうを。わか
か。

並べし軒の其中に。下京十五區祇園町。南側みて。席賃業
中谷羊七と。入旅宿屋あり。本年五月九日の事。たつらう。
主齡ハ廿五六。相應を衣服に人品も。賤しくさる。出立に。
誰が眼に見ても。官員。武家の古手と思し。さう。飄々
然と入り来り。一泊の程。依頼入ると。言葉成るの言ひ入る。
ハ是あん。大坂北堀江三番丁。林常吉方において。島津君
の大金と。奪ひ取りし。兇賊めて。向曾沼秀男。たつらう。ぞ。六
神さうぬ身の中谷羊七。怪敷姿も。さう。これハ。兼ての業体
否。應じ。何処さう来さう。知らね。さう。お早。さう。の挨拶
に。お茶よ。煙艸。さう。の座敷へ。一人の客も。業体。これハ

何曾沼秀男

頂あたまなく福あゆの神かみの御ご出での小こ提ひり提ひで度はら履はき足あし駄だも粗あら末すえ
いせぬ如ごと才さい丹たん後ごのお弁べんまで量はかりりいひ程ほど弁べん茶ちや良らも客きやく
の世間よことろくことこと簑さや鍵かぎの才さいののちある曲うた者ものとのち後ごみぞおめい
知らしららり。翌あつ日ひ十日じふ十日じふ早はや十五ご日にちの事ことなるらるら。秀ひで男をとこ
の家いえ主しゆと招まねく僕わがの西さい國こく邊への士し族しやくなるらるら。当ま地ち繁はな花はなのさ更さら
るられらの商しやう法ぽう開ひら業ぎやうのたらぬ家け禄ろく奉ほう還えん金きん所しよ持ぢなして上うへ
京きやうのたらじとられど土と地ち不ふ案あん内ない且かつのさ獨どく身しんの事ことなるらるら。宜よろし
敷しく貴あ所あと頼たのみ入いらると聞き取とる戸う主しゆの気き轉てん者もの一いつ歩ぽつて知ちる
塞さい翁うが萬ま事じの僕わがみか委あ任にんとらうらく吞のみ込こむらの場ばの
呼こ吸そ流りゆう石せき蛇だの道みちへいくはいく暫しば時じするらるら。ち席せき上じやう

いへ海うみとなく山やまとなく。佳よ香かう珍ちん味みや百ひゃく味みの飲あ食じきハイと持もて
来きるお鈿でん子しのあ菩ぼ薩さつの汁じゆの醍だい醐ご水すい飲のみらるら。愁しゆひの玉たま帝ていと玉たま
と揃そろへし歌うた舞まひの曲きょく伽が陵りやう頻ひん迦がの藝げい妓ぎの聲こゑ音ね有あ頂ちやう天てんなる
快くわい樂らくは是こゝ浮う雲うんの喜き見けん城じやう面めん白はくやあのうやと情なさけ薄うす女めの
舞まひの神かみ昼ひるぐ夜よるも神かみ佛ぶつ混こん淆ぎやう乱らんるら。世よ界かいハ杯はい盤ばん狼ろう藉せき折せ
るら来きるら一人ひとりの舞まひ姫ひめ年としハ十七じふ七しち初はつ花はなの雨あめにあるらるら。とて
姿すがたは是こゝ々々ん同どう所しよとごん町ちやうまで三さん上じやう弥や助すけ方かたの出で嫁よめまで
化け名なハ松しょう東とう水すい名なハ中ちゆう西せいのあつひまで今いま賣う出でしの全ぜん盛せい
瑠る璃りの鬘まむらべる珊さん瑚この拂はらい。それの準しゆんぜし綾あや縮ちゆう緬めん帶たいるら袖そで
うら善ぜん尽じんし美みと尽じんせら都との名な物もの着き飾かざるら羽う根ねもかるら

何なに曾ぞうの白はく皮ひ

川に晒し上たる羽二重地顔へ瓜實月の眉歩行むすごの
嬋始らる春の柳り糸櫻に風の誘うん殊なきす。未乃男が
側に吹き送る沈麝の香氣ほのめきて紋切秋の拵扱も。
妙ハニ難有と旦那ハと媚る轂音ハ微り妙り丹花彩る
唇ハ雪間ハ笑める寒紅梅鈴張る流し眼あつとりと秀
男が顔ハ打ち賦さハ秋氏ハ孔子もたまらまのにまのそ
況んや元夫たる秀男が身ハかひてあや天威ハ背く強
賊ハ心の外の曲者のハ現の如く魂棄るれ流す延ハ菱の
日の長さとも是ハの劣るべしとや酌む酒も長酣に時分ハ
とと見てとるお茶亭とそれと合図の眼の采配ハ万利天

上の中二階かゝる世界ハ地球上さうりと轉るハ秀男と松栄
線香數二百(金五十円)の定約めて天ハあつ比翅の鳥地に
あつバ連理の枝と揚貴妃りとの私語雲と雨との巫山の
夢ハ六の二人より知る者なしかくて阿曾沼秀男ハ彼の松
栄と寵愛し隔日ハ是と招き娛樂とをめる而已なうぞ。
金側時計や或ハまぐ金の鎖りと其代價百立円めて四條
中島の時計屋みて買求め又ハ寺町四條下る唐物商法
中村の由兵卫方めて洋製の金入函と其代料三十二円に
買ひ求め其外カバン蝙蝠傘ケットウ風枕あつひハまぐ
四條御旅町時計師。森田勇三郎方めて眼操し時計と

十六円めく買ひ取して周防なる官市とりの洋物商小倉
屋某へ賣却し。宇治の葉屋で初嘗と号し茶と十六斤
十六円めく買求め。防州三田尻の廻船問屋拍木仁兵衛
へ書面めく賣捌と依頼せし。五月廿二日西京なる中谷半
七方へ立飯り戸全に向ひ僕へ一度び歸國なし。遠からず
上京すべしと。暇をしく出奔りし。同月廿九日まご中谷
へ立歸り。其夜半七に言々うふ。彼の舞姫の松栄事
何卒手切とみ致しと。宜敷頼むの一言に線香敷と二十五
（十二円五十錢）ふて雪霜いとぬ松栄も吹く来る客の秋
風。一旦嘯しの切とぬなり。秀男へ夫より島原なる薄雲

太夫に通ひ詰め。夜毎毎の愉快も彼の邯鄲の夢たふて
ぬと手て粟の大金に如何なる驕奢も程々の汲めども尽ぬ
囊中の五千八百十九円のためとぞ知られり。斯て阿
曾沼秀男も心の中み思うふ。座して食へ山も空しと家と
求めて商法にからんものと。六月上旬まご半七にうち向ひ
貴身も定めて賢察めらん。大金所持せず我身の上世ま
居も不安心何卒一入尽力して。家と求めて玉をらんやと余美
なまご依頼ふウシと吞みと。下京十三区寺町通り四條下
貞安前ノ丁。東側子程才五百九十五番地の内。才一番と借受
六月九日に送籍も盡ひ。小間物と開業せしが。多分の金と

所持するもの。馭通司の勸業場へ預けんものと羊七は亦
談うれば是は且那。五妙策との申しさる。茲は一段の五相談
あり。私の宅の西隣り。軒と連ねし十九軒の江明水口山村
何某の所有をれど。此項賣却仕度の爲躰幸ひ貴身が
買ひ玉へ。毎月上る家賃多も。五活計の立つらん。悉
皆僕が引受申し。必らず利益の功と奏せんと。聞て秀男
へとて屈早。宜敷依頼の二言に忽ち持主へ示談を。金二
千五百円めて取極め。同月十九日帳切万端相済ま。何分
躰身の秀男たると。相成を妻と娶と。と良縁なる待
折しも。貞安前以煙管商法奥田源右衛門の妻の妹。親

えは上京止五区鍵屋町にて。大西勝七の妹あら。連年の十色
盛り。あかろ。愛へ梨花海棠雨と帯なる風情あり。折々奥
田へ来りぬると。秀男へ垣間見得て。忽ちあかろ。煩悩の
せのまろ。羊七は。かくと。あかろ。心は。あかろ。秀男且那の事
なれば。後々の悪く。報う。ぼじ。と。や。と。吞。と。込。と。モ。且那。あ。の
位ひの別嬪。ハ。女名所。の。西京。や。も。ま。と。こ。二。人。ハ。あり。外。ま。の。縫
針。糸。竹。讀。と。書。算。用。香。花。茶。余。の。湯。万。枝。に。通。し。才。気。質
が。実。直。に。て。親。兄。才。に。孝。行。を。り。万。事。揃。ひ。し。評。判。娘。兼。て
僕。も。且。那。さん。に。か。勸。め。り。ふ。と。思。ひ。し。折。先。駈。仕。ら。と。是
ハ。閉。口。色。お。も。ぬ。ぬ。ぬ。且。那。様。と。笑。ひ。交。り。ん。か。髭。の。莖。べ。ん。ち。

ら九分の媒人口。何の免ものど談と見ませうと。羊七の奥田
へ行と。斯と語と。源右門も。女房の里の大西へ逐二の言ひ
あめハ。大西もあふまると良縁と。ボクと千と。善の言ひ
の謬に。六月廿四日の夜。御池通り富の小路。松清と。割
烹店あて。三三九度の盃ハ。早任の江に着る。何思ひけん
源右門ハ。秀男に向ひ言ひる。斯祝言も済とれど。今
更にお頼と。あうこと離縁し玉とる。と。数と。突と出す
一言ハ。只忤然と秀男も。暫時言葉もなう。自己が
胸ハ。一物の蟻の穴より。坡の崩れ。根問ひ葉問ひ。悪し
うらんと。奥田に向ひ訳のまふ。と。貴意に任せと。然るべく

お執計らひ玉とるべしと。言葉女との返答に。然と。五兼知
忤けなしと。あうこと伴なひ立飯。短と。縁の短う夜の。酒
宴に曉む東雲より。白むハ。思と。此場の仕宜。一夜と。千夜
と。あうと。私鳥鶯の契りも。中絶て。阿積の沼に。あう
と。本意失と。阿曾治ハ。胸に悔しと。山島の尾上隔と
比翅の来。一人と。立飯。即ち。中谷羊七
方より。只今。あうと。五人来と。使人の迷。口上に。胸ハ
すまねと。秀男ハ。兼て。日備の老女。向ひ。聞き。通り。中
谷より。急用なれば。往ら。宜しく。苗守と。頼と
ら。老女に。諾して。出行く。邸へ。深縮。望に。あう。深

こ子細のあつげあつ。連立来る二人の士族本國まで知音の者
南部寅之助富田の何某推忝せり。秀男在宿志めり。こ
ろ忠六もこの老女ハ立出で。是ハくお歴々様折角
お越の事なると。このあつて主人ハ苗守なりと。聞て兩六
然らハ暫時。是めくお待のふすべしと。徐々然と座と占めて
午前八時の頃より。午後の一時の頃まで。其場と去らず
家内の様子。時う呂まで逐一ハ手簿に留て如何ハ伯母公
前今迄待ともお歸りなれば。まご後程に忝上せん。い
くお邪言と言ひ捨て。歸れば程も主人の秀男用向と
整のハ立歸。まご老女ハ顔と見ると。今日貴君のお

苗守中二人の武家がかくくと。落ものあつ物語りの胸に
釘さつ秀男が。借ハ身の上發覺せん。然し脱る計策せ
んと。二階へ上りひそむ。折々夜にけり。以前の兩士秀男
公ハお敵と。言ふ聲も。二階より。南部主との
捨て。忽ち蹴破る。忘格子。家根と傳ひて大地へとびあり
足に任せく行んとすれど。長前家根より飛ぶ折柄右の足
に傷を受け。疵持の足の其上にまご。二層の憂苦と抱と
免やせん角ゆと思ふ折。幸ひ街なる車と雇ひ。疵と押
て逸散に。跡をまご逃げたり。

押るや浪花の里に名う。めめし繁る。千陌の葉

と結びし一隊の獲物を持たし客も車懸りの陣備へ
武者の時馬や黒の隈夜寒むと凌ぐ出立に身はま
くケツトウ緋威しや萌黄威しと様々に我先馳んと抽
籤の手綱ゆるり客持咄し大改本田三丁目車夫の龜
吉云ひるるも同じ人間めを生をたぐる車に乗るあり引
もめり其まて靴と造るめとど同じ事をも乗る人に
生とて見とる富島の加賀屋に止宿のお客こそ遣ふ
お金の湯水の如く自己も車に乗せらるるがなんと結構
な身分をり羨敷とよと寄合の咄しとさるりさるり
取る查公も兼て千當田の最中かたねの神速も富島加

賀屋に到り巨細か吟味ありなれば其家の主人申もふ
貴命の客は今朝程癸足残念至極と聞くありも前
文車夫の龜吉に前刺其方が咄せし客は何処へ乗せ
ぞ明白申うせと仰に龜吉其客は同所松島中の
下。舊の備前屋今の名は小野龜次郎と申す方とさる
るも本田警察所詰一等巡查和田久吉四等巡查の
長謙吉の両士の汗馬に鞭打つて小野が宿所へ馳来
り家内不殘搜索に客と思はる年輩は廿六の士族風
俗怪しき者と住所姓名逐一訊問ありなれば僕は西国廣
島縣の士族大東信道なりと立流み云へど何処ゆらん

真氣の技の賤昧言語端とて人々を利突の両士五分と
も透るぬ。亂問にさし根強き曲者も。双士の威風に
打倒され。道る頭と小口と。覚悟とせしめし。答
るふ。嗚呼天なる哉命なる哉。斯く發覺る。上る。今
の何と云ひ。大東信道をうり。この飯の名。本名。山
口縣の舊士族。先年佐賀の江藤新平に左袒し。今般大
波北堀江林方にて。島津君の大金盜とし。阿曾沼秀男。
謀る。くと思し。此場に於て。頭とし。殘念至極と無
念の顔色。とて召捕れ。とうてい。捕繩流石有名の
妻和田と長氏。勇はし。うり。形勢なり。嗚呼無道の

富貴の浮める雲。昨日まぐの酒池肉林に。錦繡の夜の金君
君傾城の内。蒲團に。且那。尽しの。寢客も。今日ハ。それ。あ。ぬ。
引換て。身に。纏。え。る。三寸繩。掌先。喰ひ。入。る。殺縛の。い。
た。と。あ。ら。う。血の。泪。身。と。知。る。雨の。舍。り。さ。へ。天。が。下。ふ。ハ。罕。
屋。より。外。ハ。か。く。引。き。ぬ。く。身。の。成。る。果。を。是。派。を。け。
と。其。時。秀。男。裏。中。に。ハ。殘。金。三。千。〇。〇。三。円。と。八。十九。九。九。厘。
あり。其。後。同。月。三。十。日。京。都。府。へ。物。引。た。り。中。谷。半。七。
松。葉。に。あ。ら。く。其。外。秀。男。に。關。係。の。諸。人。不。殘。召。さ。れて。
お。吟。味。あり。早。竟。阿。曾。沼。秀。男。の。御。牙。置。ハ。如。何。知。ら。
ざ。ら。ざ。ら。正。道。奉。導。て。恩。賞。と。賜。さ。る。人。も。ま。う。る。中。に。

自己の心の置き所を、
みだり不孝と尽く、
万国の秀を以て日本國の民とせり、
其廣恩と忘却をし、
しうぶずや。實の怖るべし、
あり。幼稚の時より善く導き、
又慈悲たり。國恩報ずるす端なき、
新聞の巨細あると茲に、
徳悪の一端あり。ちりちり、
西南河曾の白波大尾

七五八五厘

大坂府平民

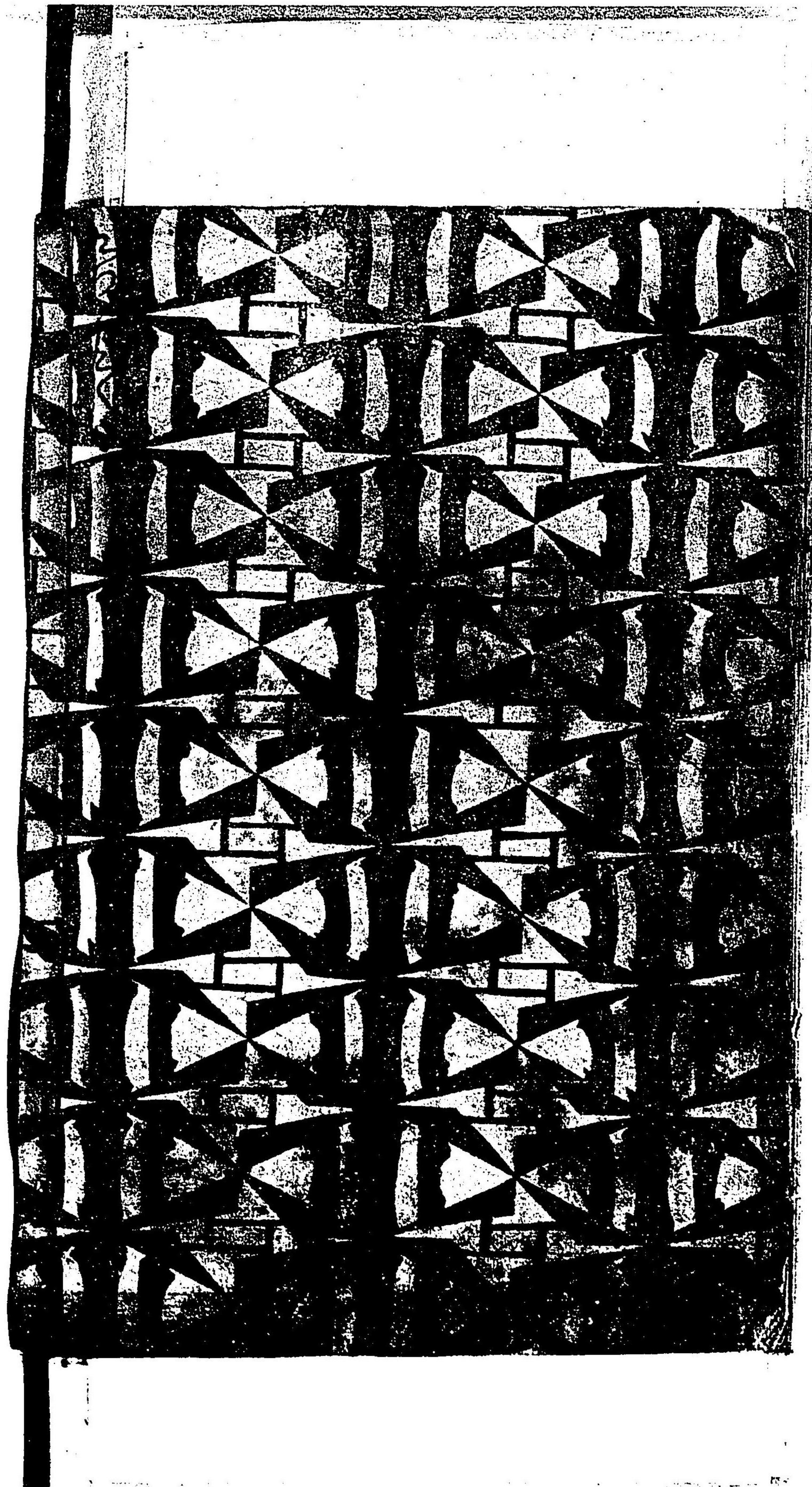
大坂府第一大区三小區
大和町才十番

編輯人 長尾吉之助

大坂府平民

大坂府第一大区九小區
平野町五丁目





特42
848

205218-000-3

特42-848

西南阿曾の白波

長尾 吉之助/編

M11

EDV-0268

